

が営まれていた地域と推定されてきました。今回の多量な木簡の発見は、この推定を強く裏づけたものといえましょう。

木簡学会としては、南に接する長屋王邸跡が破壊されたことについて、痛恨の思いを抱いています。同遺跡が長屋王邸であることが判明した時には、すでに工事が進行しており、保存の手の打ちようがなかったことは悔やんでもあまりあるものがあります。その北に接する平城宮東院南方遺跡とその周辺については、大型の百貨店の進出にともなう現状の変貌はすでに現実のものとなりつつあり、緊急に保存措置が構ぜられるべき地域と考えます。

わたくしたちはこのように検討した結果、左記の二点を関係機関に要望します。

一、長屋王家木簡や、今回の二条大路出土木簡の保存、整理、公開の体制を充実させること

二、東院南方遺跡の万全の保存措置をはかること

一九八九年二月三日

木簡学会

編集後記

本誌の編集は、創刊以来、佐藤宗諄氏と鬼頭清明氏を中心に進められてきたが、本年度から他の委員が一年交替で引きうけることになった。十年に余る両氏の御尽力に対し、会員諸氏とともに深く謝意を表したい。

さて今回編集担当となって、改めて痛感したのは、編集実務が奈文研のスタッフに極めて大きく依存していることである。とりわけ窓口となられた寺崎保広氏の奔走がなければ、本号の編集は成り立たなかった。機関誌とはいえ、二段組、二〇〇頁前後ともなれば、ヴォリニウムは優に単行本に匹敵する。研究所への依存は、本誌の性格上やむをえないところもあるが、いつまでもこのままでよいとは思わず、会員諸氏の御理解のもとに、少しずつでも改めてゆく必要がある。

本号の編成は、ほぼ例年のとおりである。お忙しい中、快く御協力いただいた各地の発掘担当の方々に、厚く御礼申し上げる。また論文の方も、昨年の大会報告から山尾氏の論考をいただき、工藤・春名両氏の投稿二篇と合わせ、充実したものになった。本誌の論文は、これまで大会の講演や報告に基づくものが多く、日本史関係の投稿は概して少ない。若い読者も含め、積極的な投稿をお願いしたいと思う。

(東野治之)